OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	癌と人
Author(s)	栗村, 敬
Citation	癌と人. 1996, 23, p. 27-29
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/23902
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

癌　と　人

栗　村　　敬*

羽倉所長より「癌と人」に寄稿するようにいわれ簡単に応じたが，いざ考えてみると私は適任ではないと感じはじめている。先日，山崎正和名誉教授のお話を聞く機会があった。確かタイトルは「芸術の21世紀」であった。先生によると「芸術の21世紀」と「21世紀の芸術」とは違うそうである。よく解る気もするが区別は難かしい（特に私にとっては)。「癌と人」と「人と癌」はどう違うのか考えてみた。大きな違いがあるように思える。「癌と人」に相応しい文章が書けるような気がしないが，途中で「人と癌」になってもいいやという気で書き始めることとした。私は10年以上，鳥取大学医学部にお世話になっていた。患者としてではなく教官としてである。臨床の先生方とお話する機会も多く癌のこともいろいろ考えさせられた。古賀成昌教授（すでに故人となられた）は消化器癌の手術が大変お上手と聞いていた。また，先生の研究室は研究も盛んでいつも私は手本としてみていた。その古賀先生が手術できないような胃癌で亡くなられようとは思ってもいなかったことであった。常日頃「私は検診はうけないんですよ」といっておられたので複雑な気持がした。というのは，私も検診をうけない方で学生に向って「レントゲンをあてて，何もなかったらレントゲン照射の害だけ残るから」なんて下らぬ説明をしていたが，その後，大阪大学では定期健康診断はうけるように努めている。鳥取大学に居るときは同僚の先生方の中にも癌の治療をうける方が珍しくないような気がしていたが今みてみるとどこも同じだなあと感じている。

こうすれば癌になりやすい。このような条件があると癌になるとよく言われてきた。若い時から耳を傾けてきたことが定説でなくなることも少なくなかった。自分は癌については素人だが自分が見聞してきたことで今でも印象に残っていることを少し書いてみたい。1960年代後半にヒューストンにあるベイラー医科大学に留学させて頂いたことがある。当時，隣にあるテキサス大学M.D.アンダーソン病院・癌研究所にドモコフスキー教授がおられて日本人研究者も参加して研究が行われていた。ヒトの腫瘍組織の中にレトロウィルスが見られるということを常に報告しておられた。また，カリフォルニア大学のスピーゲルマン教授はヒトの乳癌組織の中にマウス乳癌ウィルスに似たウィルスが存在している可能性を述べておられた時代がそれ以前にあった。後に，ヒトの成人T細胞白血病がレトロウィルスで起るという日本人研究者達の報告をみたときは驚いたものである。また，そのウィルスが母乳を介して感染すると聞いてドモコフスキー先生やスピーゲルマン先生の報告と関連はないにせよ動物で起ることは，やはり，人間でも起るのだと感じたものである。同じ頃，ヒューストンではヒトの子宮頸癌が単純ヘルペスウィルスによるとの発表をしている先生もいたが，これはどうやらパピローマウィルスが原因ということで決着がついたようである。研究は難かしいもので定説となるには時間がかかり，また，定説も崩れて行くのだと痛感している。

最近，エイズ患者に見られるカポジ肉腫が

* 大阪大学微生物病研究所ウィルス感染制御分野教授

ヒトヘルペスウィルス８型によるという報告があるが，ウィルス学の大御所であるロイズマン教授は「あれはパッセンジャーウィルスだよ」と新幹線の中で私に話していた。どのような結論になるのか関心をもっている。故伊東教授が中国南部に見られる上咽頭癌はEBウィルス感染と同地方にある植物関連物質の共同作用で発生するという学説をたてておられた。先日，米国を訪れたときこの話を話題としたら，ピアソン教授が，「いやそうじゃない。EBウィルスと遺伝的要因が原因なんだよ。何故なら同地方の人が米国に移住して環境を変えても同じことが起るからだ。」と話してくれた。

EBウィルスのことを書いて想いだすのが今年ケニアを訪れた時のことである。ビクトリア湖はケニア，ウガンダ，タンザニアに囲まれる美しい湖である。この周辺の病院にはEBウィルスが原因のバーキッドリンパ腫の子供患者がよく入院している。キスムの町の病院でも数人の患者をみた。院長が母親に抱かれている一人の男の子を指さして，「この子はリンパ腫のため眼がとび出していたんだが，化学療法でもとのようになったんだ。母親は子供を取り戻すことができたんだ。」といってくれた。本当に治ってしまったのかどうか，私には解らない。そうであって欲しいと思ってその母子を見直したものである。なぜこの地方にこの病気が多いのかについては大里名誉教授の優れた研究もあり，実際に患者をみていると基礎的研究の重要さが再確認される。

私は癌保険に加入しているが，お世話になっていない。私は循環器系の病気で死ぬのであろうと思っている。父親がそうであったからである。父親が死亡したときに父親の友人に叱られたことがある。「医学部を卒業していながら父親を助けられなかったのか」と。やはり，病気とか健康とかはかなりの経験を積まねばとやかくは言えまい。特に医師である必要もない。先年，癌の研究でノーベル賞をもらったハワード・テミンが肺癌でなくなった。先の古賀教授も然りである。名医，大研究者は若い医師の言うことを聞かないからこうなるのだろうか。やはり自分自身で健康管理するだけではなく，客観的にチェックして頂くことも必要なのだと痛感する。

朝早く，薄暗い中を電車の駅に向って歩く。おいしそうに煙草をふかして前を歩く人。後から歩く私はまさに不快そのもの。今日は朝の爽やかさを失ったと思う。このような経験は誰にもあるであろう。発癌物質を売る会社に何もアクションを起せない癌研究者。矛盾はこの世の中に沢山あるものだと思う。人類が火を使うことを覚えた時から，また，煙草をすうようになってから，人為的に発癌物質を食べ，また，吸うようになってきたツケが今，まわってきているのかも知れない。しかし，チェーンスモーカーで長生きしている人も沢山いらっしゃる。やはり，環境因子だけでなく遺伝的要因も大きく関係しているのであろう。当然のことのように思える。即物的社会の色彩の濃い大阪の町で何も考えないで生きていると癌のことなど忘れて気楽に生きて行けるような気がする。デンマークのグラウバレ教授と話をしたことがある。彼はヘビースモーカーである。彼の父もそうで，13歳の時に吸い始めて現在85歳だそうだ。現在も吸いつづけている。煙草を吸うと癌になる人と，ならない人の区別が医学の力で出来ないのだろうか。世の中極端な話をする人が賢く見えて実際に社会では役立っていないことが多いのではないだろうか。試験官の中で起ることは生体内で必ずしも起らない。そのような例を少なからず私も知っている。女性の服装に流行がありそれが循環するのと同じようにこれから研究のファッションも変るだろう。また，変ってもらわねば困る。人間の生体レベルの研究がわれわれにとっては一番大切なのである。まあ，研究とは無駄の多いものであり，私自身やってきたことは全部無駄の中に入っていることを考える

と，「生命」，「癌」の問題が全て解明される前に人類は滅びるような気もする。

違うガンのことで常日頃，不思議に思っていることを書いてみる。「近ガン，老ガン」についてである。この「文明」の進んだ時代に，オートフォーカスのカメラ全盛の時代に，眼の度に合わせて眼鏡を買い換えて行く人間。一生に一度，眼鏡を誂えたら（もちろん，おしゃれは別だが）実用には差し支えないようなものが出来ないのだろうか。これなら他人の眼鏡を用いることもでき，レンズの大量生産もできると思うのだが。つるの長さは仕方がないから輪ゴムでも使ってもらうことにする。これも出来ないようでは，それ以上に多様性のある癌など解明できる筈がないという気がしてならない。

一時，「遺伝子治療」という言葉が流行した。今，反省期に入っている。一流ジャーナルにさきがけて報道するので有名なワシントン・ポスト紙の記事を米国NCIの満屋先生がFAXで送って下さった。「科学者やジャーナリストが遺伝子治療を売り込みすぎている」という見出しとともに全ての試みの殆んどが一様に失敗していると書かれている。病気に関係のある遺伝子がわかればすぐに遺伝子治療というものではないようである。われわれは研究成果を誇大視して報告する傾向があり，５年前に始った人への遺伝子治療が癌にやってくる日は予測できない。同紙によるとヒト・ゲノム・プロジェクトの開始以来，毎週のように病気を起す可能性のある変異した遺伝子に関する報告がある。しかし，直ちに治療に結びつくものではない。とは言われてもやはり大きな期待感をもつ人が多いのは当然である。これまでの基礎医学研究，臨床医学研究の成果が応用されて一人でも多くの癌患者が苦しみから救われることを期待している。